

# 「かもしれない」の諸相

蔣 家義

## 1. はじめに

本稿では、可能性を表す「かもしれない」、「Pかもしれない、¬Pかもしれない」構文、及び記憶の呼び起こしと行動予定を表す「かもしれない」を論じたい。

まず、2節で可能性を表す「かもしれない」を分析する。次に、3節で「Pかもしれない、¬Pかもしれない」構文を考察して、4節で記憶の呼び起こしと行動予定を表す「かもしれない」を分析する。

## 2. 可能性の「かもしれない」

### 2.1. 先行研究

例文(1)(2)における「かもしれない」の意味は一般的に、可能性を表すと捉えられている。例えば、仁田 (1991、2000)、益岡 (1991、2002、2007)、森山・安達 (1996)、日本語記述文法研究会 (2003) などがある。

- (1) それから二三日たってまた第二号の自画像を前と同大の板へかいてみた。今度は少し顔を斜めにしてやってみると、前とは反対にたいへん温和な、のっぺりした、若々しい顔ができてしまった。妻や子供らはみんな若すぎると言って笑ったが母だけはこのほうがよく似ていると言った。母親の目に見える自分の影像と、子供らの見た自分の印象とは、事によったら十年以上も年齢の差があるかもしれない。  
(寺田寅彦『自画像』)
- (2) 「いえ場所が悪いからだ」と今度は広田先生が言った。「あまり人通りが多すぎるからいけない。山の上の寂しい所で、ああいう男に会ったら、だれでもやる気になるんだよ」  
「その代り一日待っていても、だれも通らないかもしれない」と野々宮はくすくす笑い出した。  
(夏目漱石『三四郎』)

仁田 (1991: 60-61) は「かもしれない」を「判断のモダリティ」の表現に関わる

「押し量りの確からしさを表すもの」の代表的な表現形式としている。「押し量りの確からしさを表すもの」とは「押し量られた内容である言表事態がどれ位の確からしさをもって成り立つのかを表したものである。言表事態成立への蓋然性を伴った押し量りを表したものである」(p. 61)。「かもしれない」は「蓋然性が低いことを表す形式である」(p. 61)。

益岡 (1991 : 115) は「かもしれない」を「事態が成り立つ蓋然性 (確かさの度合い) を表すもの」としている。「かもしれない」が第一義的に確かさの「低い度合い」を表し、第二義的に「断定保留」を表すと主張している (p. 115)。

仁田 (2000 : 130) は『カモシレナイ』類の表す蓋然性判断<sup>①</sup>を可能性把握と仮称しておく。可能性把握とは、命題内容として描き取られている事態が、生起する可能性を持ったものであることを示している。事態生起の可能性を描き出すことによって、事態の成立を、不確かなもの、可能性程度の確からしさのものとして捉えていることを表している」と述べている。また、仁田 (2000 : 131) は「蓋然性判断は、事態の成立を、想像・思考や推論の中に捉えたということを、単に表しているのではなく、確からしさの度合いへの言及を焼きつけたあり方で表している」と述べた。事態生起の可能性は、不生起の可能性でもあり、したがって、『カモシレナイ』類に焼き付けられている確からしさは、低いタイプのものである」と指摘している。

これらの先行研究は本質的に同じであり、「かもしれない」を可能性を表す表現と捉えている。

## 2.2. 認知心理的な分析モデルに基づいた分析

可能性を表す「かもしれない」には、2つの性質があると考えられる。

1つ目は「かもしれない」に推量があることである。推量は典型的な認識的モダリティの根底に共通するものであり、想像や思考という高次の心的過程 (詳しく言えば、既得情報の入力、想像や思考によつての処理、そして新しい情報の出力という過程である) を経ることと、新しい情報に対して不確かな心的状態を抱くこととの2つの側面を持っている。言い換えれば、

推量とは想像や思考という高次の心的過程を経て新しい情報を生じさせ、かつ、その出力情報に対して不確かな心的状態を抱くことを表すものである。

2つ目は「かもしれない」が (不確かな心的状態の) 低い確実性を明示することである<sup>②</sup>。仁田 (2000 : 121) の指摘したように、『ダロウ』などによって表される推量は (中略) 固有の確からしさの度合いを指し示しているわけではない。この点は、『カモシレナイ』『ニチガイナイ』などのように、形式が直接的に確からしさの度合いを語っている蓋然性判断のモダリティとは異なっている」。益岡 (1991 : 116) も『に

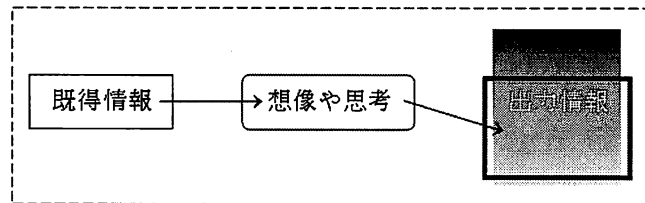
『違う』と『かもしれない』が確かさの度合いの中の特定のものを表す、「『だろう』は（中略）基本的には確かさの度合いに限定はない」と指摘している。

ここでは、蔣（2008 a :10-13）の提案した認知的心理的な分析モデルに基づいて、可能性の「かもしれない」を次のように分析し記述する<sup>③</sup>。

「かもしれない」は推量における出力情報に対する低い確実性を明示し、かつ、低い確実性をプロファイルする。

図示は図1となる。基盤（base）<sup>④</sup>全体は点線枠で示し、推量における高次の心的過程は枠と矢印で示し、確か性の程度は右の枠の濃淡で示した。プロファイル（profile）される低い確か性は太線枠で示した。

図1 「かもしれない」の認知的心理的な分析モデル



### 3. 「P かもしれない、¬P かもしれない」構文

#### 3.1. 「かもしれない」における非明示的・明示的な含意

例文(3)(4)のように、可能性を表す「かもしれない」は相矛盾する事柄を並立させることができるが、「だろう」はできない（仁田 2000 : 130、庵・高梨・中西・山田 2000 : 133、宮崎・安達・野田・高梨 2002 : 145、日本語記述文法研究会 2003 : 153）<sup>⑤</sup>。

(3) 田中さんはうちにいるかもしれないし、いないかもしれない。

×田中さんはうちにいるだろうし、いないだろう。

（庵・高梨・中西・山田 2000 : 133）

(4) 終戦宣言という悪質な茶番を思いついたのは局長かもしれないし、知事かもしれない。

×終戦宣言という悪質な茶番を思いついたのは局長だろうし、知事だろう。

（宮崎・安達・野田・高梨 2002 : 145）

日本語記述文法研究会（2003：153）はこの違いの原因を「論理的には、ある可能性があるということは、そうでない可能性もあるということでもある」と説明している。「いるかもしれない」においては、「いる」の可能性があることが「いない」の可能性あることを含意している。「局長かもしれない」においては、「局長だ」の可能性あることが「局長でない／知事だ／課長だ／…」の可能性あることを含意している。つまり、「Pかもしれない」が「¬Pかもしれない」を含意している。それで「Pかもしれない」と「¬Pかもしれない」が並立して、「Pかもしれない、¬Pかもしれない」の構文が可能となる。

本稿は語構成の視点から、非明示的な含意と明示的な含意という概念を使って、「Pかもしれない、¬Pかもしれない」構文の成立条件を分析してみる。

「かもしれない」がある可能性を示しながら、そうでない可能性を含意している。「かもしれない」における含意は非明示的な含意（言い換えれば、意味上の含意）であると同時に、明示的な含意（言い換えれば、形式上の含意）である。語構成から見ると、「かもしれない」は副助詞「か」、係助詞「も」、動詞「知れる」の未然形「知れ」、助動詞「ない」からなる連語である。「か」と「しれない」は低い確実性を表す機能を果たし、「かもしれない」が相矛盾する可能性を非明示的に含意できるようにさせる。一方、「かもしれない」における係助詞「も」は「類似した事物の中からある事物を取り立てる、逆に言えばある事物を取り立てることで、類似した事物の存在を暗示する」（播磨 1998：203）機能を果たし、「かもしれない」が相矛盾する可能性を明示的に含意できるようにさせる。日常言語においては、明示的な含意は非明示的な含意より強い。「も」が「か」と「しれない」によって可能になる非明示的な含意を明示的な含意までに強くさせる。

この非明示的な含意と明示的な含意の関係は「かもしれない」が連語として定着する前の、「かもしれない」に類する「かしれぬ」の考察によって分かる。播磨（1998：195）は「支度にでもまいりましたかしれません」における「かしれぬ」を論じるとき、この「かしれぬ」が「ある判断を提示し、その判断があっているかどうか『わからない』とする意味を持ち、『かもしれない』に置き換え可能と思われる。ただし助詞『も』を欠くため、他の可能性を暗示する含みがないように思われる」と述べている。つまり、「も」を欠く「かしれぬ」は非明示的に相矛盾する可能性を含意しても、明示的に含意していないから、相矛盾する可能性を含意する含みが読み取りにくい。「も」を伴う「かもしれない」は非明示的にだけでなく、相矛盾する可能性を明示的に含意している。

「かしれぬ」と「かもしれない」をそれぞれ「ある可能性がある」と「ある可能性もある」にパラフレーズすれば、より理解しやすいであろう。「ある可能性がある」は「そうでない可能性がある」を非明示的に含意しても、明示的に含意できない。結果として「そうでない可能性がある」という含みが読み取りにくい。一方、「ある可

能性もある」においては、「も」が「類似した事物の存在」、つまり「そうでないこと」を含意し、「ある可能性もある」が非明示的にだけでなく、「そうでない可能性がある」を明示的に含意している。結果として「そうでない可能性がある」という含みが読み取れる。

要するに、「か」と「しれない」は低い確実性を表し、「Pかもしれない」が「 $\neg P$ かもしれない」を非明示的に含意できるようにさせる。日常言語においては、非明示的な含意があっても、その含意が読み取りにくい。一方、「も」は「 $\neg P$ 」の存在を強く含意し、「Pかもしれない」が「 $\neg P$ かもしれない」を明示的に含意できるようにさせる。より強い明示的な含意があって始めて、その含意が読み取れ、「Pかもしれない」と「 $\neg P$ かもしれない」の並立も可能となる。

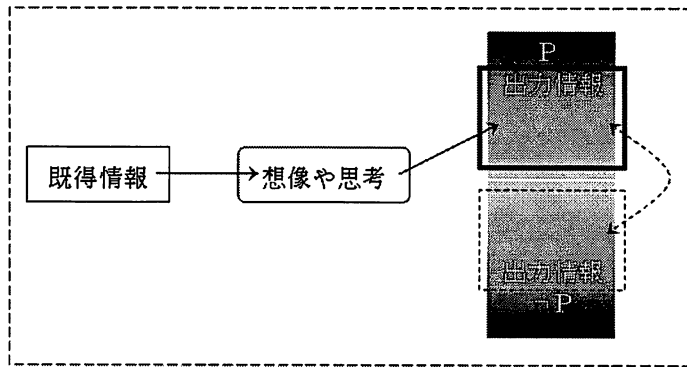
### 3.2. 「かもしれない」の認知心理的な分析モデルの拡充

3.1節で「かもしれない」がある可能性を示しながら、そうでない可能性を含意しているという現象を分析した。この特徴を考慮に入れて、2.2節の「かもしれない」の認知心理的な分析モデルを次のように拡充することができる。

「かもしれない」は推量における出力情報に対する低い確実性を明示し、否定の出力情報に対する低い確実性をも含意し、かつ、低い確実性をプロファイルする。

図示は図2となる。図2では、右側の枠は2つある。上の枠の濃淡は出力情報(P)に対する確実性の程度を示し、下の枠の濃淡は否定の出力情報( $\neg P$ )に対する確実性の程度を示した。「かもしれない」の明示するPに対する低い確実性は太線枠で示し、含意する $\neg P$ に対する低い確実性は点線枠で示した。曲線の矢印は含意の関係を示した。また、図1と同じように、基盤全体は外側の点線枠で示し、高次の心的過程は枠と直線の矢印で示し、プロファイルされる低い確実性は太線枠で示した。

図2 「かもしれない」の認知心理的な分析モデル (拡充)



#### 4. 記憶の呼び起こしと行動予定の「かもしれない」

##### 4.1. 記憶の呼び起こしと行動予定の用法

ここでは、話し手自身の記憶の呼び起こし (例文(5)) と行動予定 (例文(6)) (仁田 (2000 : 131)、宮崎・安達・野田・高梨 (2002 : 147)、日本語記述文法研究会 (2003 : 154)) のような「かもしれない」の意味を説明しよう。両者は想像や思考という高次の心的過程に関係がない用法である。

(5) 急いでいたので、エアコンを切らずに来た {かもしれない / ? だろう}。

(6) 今晚、君に電話する {かもしれない / ? だろう}。

(日本語記述文法研究会 2003 : 154)

例文(5)の「だろう」の不適格性について、仁田 (2000 : 117) は「記憶を呼び起こせばいいだけの事態、つまり、想像し思考し推論することではじめて捉えられる、といった類の事態ではない事態に対しては、定かでなくとも、推量を使うことはできない」と説明している<sup>⑥</sup>。言い換えれば、「だろう」の不適格性は記憶の呼び起こしが高次の心的過程に関係がないからである。「かもしれない」の適格に関する仁田 (2000) の考え方は「『カモシレナイ』類が、単に、事態の成立を想像・思考や推論の中に捉えた、ということを表しているだけ」ではなく、「確からしさの度合いへの言及を焼きつけたあり方で表している」からである (仁田 2000 : 132) と理解することができる。

本稿は記憶の呼び起こしの「かもしれない」<sup>⑥</sup> を次のように説明してみたい。

話し手自身の記憶の呼び起こしは想像や思考という高次の心的過程に関係がなく、長期記憶の想起によって再生・再認された情報に対する低い確実性を表している。こ

の場合、「かもしれない」が適格になるのは「かもしれない<sub>可</sub>」の意味が一般化 (generalization) したからである。「かもしれない<sub>可</sub>」は本来、高次の心的過程を経て新たに生じた情報に対する低い確実性を表しているが、つまり、情報が高次の心的過程を経て新たに生じたものであるという条件を持っているが、一般化して記憶の呼び起こしのようなその条件の欠ける場合においても使用可能になる。

記憶の呼び起こしと同じく、行動予定も想像や思考という高次の心的過程に関係がない。行動予定は話し手自身の未来の行動の実行に対する低い確実性を表している。「かもしれない<sub>行</sub>」も「かもしれない<sub>可</sub>」の意味の一般化であると考えられる。要するに、記憶の呼び起こしと行動予定の「かもしれない」は「かもしれない<sub>可</sub>」の意味の一般化であり、低い確実性を明示することがこれらの用法の共通点である。

また、筆者は中国語の場合、記憶（話し手自身の記憶だけではない）の呼び起こしにおける低い確実性を表す表現は情態動詞（助動詞、情態助動詞、能願動詞などとも呼ばれる。中国語の主なモダリティ表現である）より、情態副詞（語気副詞などとも呼ばれる。中国語のモダリティ表現の一種である）の方が適格であると語感から判断する。

(7) ? 我可能没关空调就来了。

○我好像没关空调就来了。

エアコンを切らずに来たかもしれない。

(8) ? 他的生日可能是10月5日。

○他的生日好像是10月5日。

彼の誕生日は10月5日だったかもしれない。

(9) ? 《雪国》的作者可能是川端康成。

○《雪国》的作者好像是川端康成。

『雪国』の作者は川端康成だったかもしれない。

英語の場合、森山（1995：173-174）は次のように指摘している。

“must” や “may” のような形式は、未知推測タイプの内容について使われるのが普通であり、直接経験忘却タイプは “I think” を使うのが普通である。例えば、自分が戸を閉めたかどうか忘れたような場合は、

I think I locked the door. （ドアを閉めたと思う。）

と言うのが普通であって、

#I must have locked the door. （ドアを閉めたにちがいない。）

と言うと不自然だという（正気がないなど、別人について言うような意味になる）。

（森山 1995：173-174）

これは記憶の呼び起こしと行動予定のような高次の心的過程に関与しない用法に比べれば、高次の心的過程に関与する用法がより典型的な認知的モダリティであることを証明していると考えられる。

#### 4.2. 「かもしれない」と「にちがいない」の違い

4.1節で「かもしれない」に話し手自身の記憶の呼び起こしと行動予定の用法があると述べた。話し手自身の記憶の呼び起こしと行動予定の用法はいずれも高次の心的過程に関係がない用法である。「にちがいない」には、これらの用法がない。

森山（1995：173）は「にちがいない」（及び「だろう」）が「未知のものを推測するという内容しか表せない」、「直接経験をしても忘却したために不確実な主張しかできないという場合」使えないと指摘している。杉村（2000：82）も「過去の記憶を想起して述べる想起文において、『カモシレナイ』は使えるが、『ニチガイナイ』は使えない」と指摘している<sup>9</sup>。また、森山・安達（1996：35）は「にちがいない」（及び「はずだ」）が「話し手が意志的に行う未来の動作を述べるときに使うことはふつうない」と指摘している。

要するに、必然性を表す「にちがいない」はあくまでも高次の心的過程を持っている。「かもしれない」は高次の心的過程に関係のある、可能性を表す用法の他に、高次の心的過程に関係のない、記憶の呼び起こしと行動予定の用法などがある。

「かもしれない」と「にちがいない」との違いについては、杉村（2000：74-134、2003：261-274、2004：103-104）が詳しい。杉村（2000：85）は「『カモシレナイ』と『ニチガイナイ』は、蓋然性の高低や可能性の分散の有無という量的な違いではなく、認識と推量判断という質的な違いによって区別される」と述べている。この「認識」とは「話し手がある事態の成立を見たままに捉えたり、記憶のままに捉える」（杉村（2000：76、2003：262））のである。つまり、「かもしれない」が推量の関与しないものであると主張している。さらに、杉村（2004：104）は「『カモシレナイ』は確かに推量文にも使われるが、推量の意味は推量文という文の意味に帰せられる」と主張している。本稿は「かもしれない」が高次の心的過程を持つ場合と、持たない場合があると考えている。

#### 5. おわりに

以上、可能性を表す「かもしれない」、「Pかもしれない」、「¬Pかもしれない」構文、記憶の呼び起こしと行動予定の用法などを論じた。

2節では、可能性を表す「かもしれない」を考察した。まず、2.1節で先行研究を論述した。2.2節で認知心理的な分析モデルに基づいて、その「かもしれない」を分析して記述した。3節では、可能性を表す「かもしれない」に関わる「Pかもしれな



い、 $\neg P$ かもしれない」構文を考察した。3.1節で語構成の視点から、非明示的な含意と明示的な含意という概念を使って、その構文の成立条件を説明した。3.2節で「 $P$ かもしれない、 $\neg P$ かもしれない」構文を考慮に入れて、「かもしれない」の認知的心理的な分析モデルを拡充した。4節では、記憶の呼び起こしと行動予定を表す「かもしれない」を分析した。記憶の呼び起こしと行動予定の用法を持たない「にちがいない」と「かもしれない」との違いにもふれた。

なお、本稿の論述は先行研究に負うところが大きいですが、モダリティに関しては、多少異なる考え方（例えば、2.2節の「推量」、「認知的心理的な分析モデル」など）を持っているので、難解なところがあるかもしれない。この場合、拙稿（2008a、2008b）を参照されたい。

#### 注釈

- ① 「蓋然性判断とは、命題内容をなしている事態が、どれくらいの確からしさをもって成り立っているかを捉えたものである」（仁田（2000：95））。
- ② 三宅（1992、1995）、宮崎・安達・野田・高梨（2002：145）のような、「かもしれない」は可能性のあることを表しているが、可能性の程度を表していないという考え方を取る先行研究もある。
- ③ 認知的心理的な分析モデルは蔣（2008a：10-13）の提案した、認知的モダリティのための分析モデルである。この分析モデルは話し手がどのように事態を捉えるかということと、話し手又は聞き手が認知的モダリティと認知的モダリティ表現を認知の対象として、どのように捉えるかということ进行分析し記述するモデルであり、文字による記述と図示からなる。詳しくは、蔣（2008a：10-13、2008b）を参照。
- ④ 高次の心的過程（既得情報の入力、想像や思考による処理、新たな情報の出力）、出力情報に対する不確かな心的状態、確実性の程度などからなる。
- ⑤ 「だろう」だけではなく、「らしい」や「にちがいない」などの認知的モダリティ表現でも、このようなことは起こらない（仁田（2000：130）、日本語記述文法研究会（2003：153））。
- ⑥ 森山（1995：173）も「だろう」が「未知のものを推測するという内容しか表せない」、「直接経験をしても忘却したために不確実な主張しかできないという場合」使えないと指摘している。
- ⑦ 以下、記憶の呼び起こしの「かもしれない」を「かもしれない<sub>記</sub>」と表記し、行動予定の「かもしれない」を「かもしれない<sub>行</sub>」と表記し、高次の心的過程を経て新たに生じた情報に対する低い確実性を明示する「かもしれない」を「かもしれない<sub>明</sub>」と表記する。
- ⑧ ただし、仁田（2000：134）は次の例文を挙げて、「単に記憶を呼び起こせばよい場合にあって、『ダロウ』が逸脱性を有するにもかかわらず、『ニチガイナイ』は適格である」と述べている。

船がニューヨークの波止場に横着けになったときの不思議な感情を私は二度と忘れないだろう。私たち十四人のイギリスの若者はただ立っていた。なかでも私がいちばん興奮していた {にちがいない/??ダロウ}。

<参考文献>

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 蔣家義（2008a）「ハズダと認識的モダリティのための認知心理的な分析モデル」『言語と交流』（言語と交流研究会），11
- 蔣家義（2008b）「認知心理分析模式与日语认识情态」『衡水学院学报』（衡水学院），5
- 杉村泰（2000）『現代日本語における蓋然性を表す副詞の研究』名古屋大学博士学位論文
- 杉村泰（2003）「続・カモシレナイとニチガイナイの異質性—コーパス調査の結果から—」『言葉と文化』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻），4
- 杉村泰（2004）「蓋然性を表す副詞と文末のモダリティ形式」『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科），25-2
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（編），『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 播磨桂子（1998）「「かもしれない」の成り立ちについて」『日本文学研究』（梅光女学院大学日本文学会），33
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志（2002）「判断のモダリティ—現実と非現実の対立—」『日本語学』（明治書院），21-2
- 益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 三宅知宏（1992）「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢・日本学篇』（大阪大学），26
- 三宅知宏（1995）「カモシレナイとダロウ—概言の助動詞③—」宮島達夫・仁田義雄（編），『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 森山卓郎（1995）「ト思ふ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～φ～不確実だが高い確信があることの表現—」宮島達夫・仁田義雄（編），『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版
- 森山卓郎・安達太郎（1996）『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ6 文の述べ方』くろしお出版